（社）日本建築協会
『建築と社会』2008 年 10 月号

【書評】

『都市再生･街づくり学　大阪発･民主導の実践』

大阪市街地再開発協議会　編

発行/創元社

2008 年 6 月 10 日

A5 版 328 頁　本体 2,520 円（税込）

街づくりのライフストーリーワーク

弘本由香里

大阪をフィールドに広義のまちづくりに関わる機会が増えてくるなかで、私がもっとも深刻だと感じることの一つに、歴史の断絶感がある。いわゆる教科書上の歴史から、身近な地域史・個人史そして街づくり史まで共通していえる問題ではないかと思う。

大阪都市圏には、古代から近世へと長い時間をかけて形成されてきた、都市と在郷町や村落の空間基盤や精神性が深層に根強く存在しているはずである。しかし、大都市圏であるがゆえに、近代化による急激な都市域の拡大、その後の甚大な戦争被害、さらには戦災復興から高度経済成長期に至る著しい都市化など、極めて激しい変化にさらされてきた。この、近代化、戦災、高度経済成長の三つの波が、地域のコスモロジーと記憶の断絶を余儀なくしてきたことは否めないだろう。

一方で、激しい変化の波の数々は、民主導による近代的街づくりや全国有数の都市問題に向き合う環境改善の諸運動とともに、専門家集団や行政の実践に根差したスキルを育んでいったことも確かである。都市再開発法の制定や新制度の導入をはじめ、大阪での再開発事業の蓄積の数々が国の法制度をリードしてきたのは事実だ。密集市街地の住環境整備でも、全国に先駆けて住民参加の手法を積極的に導入してきた実績がある。数々の成果がありながら、肯定的な歴史や智恵として十分にその価値が一般市民に共有されていない観があるのはなぜだろうか。上記の歴史の断絶によるのではないかと思えてくるのである。

今夏、大阪市街地再開発協議会 50 周年記念事業として出版された『都市再生・街づくり学　大阪発・民主導の実践』を手にした折、直感的にこれは大阪の街づくりに関する「ライフストーリーワーク」ではないかと思った。「ライフフトーリーワーク」とは、福祉事業におけるケースワークなどで用いられる手法の一つである。たとえば、幼時に過酷な生育環境におかれた子どもたちは、自らの生い立ちの記憶を持てないまま成長していくことがある。そうしたケースでは、自己肯定感を育むことが難しく、ともすると自分や他者を尊重する気持ちを失うことにもなりかねない。記憶の喪失を埋め、過去の事実を受け止め、一連のライフトリーリーとして表現することが可能になったとき、多くが自らの人生や他者との関係を肯定的に前向きに捉えることができるようになるという。「ライフストーリーワーク」とは、それをサポートするための取り組みのことである。

そこで、本書である。近代化、戦災、高度経済成長の三つ激しい波にさらされてきた街づくりの現代史を背景に、同書の執筆者である現役の都市再生のプロフェッショナルたちがまさに格闘してきた、高度経済成長期からバブル経済崩壊、阪神・淡路大震災、そして縮小型社会に向き合っていく軌跡を真摯に振り返っている。未来への資産として伝え活かすべき智恵や教訓を明らかにし、まちの形成に関する歴史の断絶、地域のコスモロジーと記憶の断絶を克服すること。そして自己肯定可能な街づくりへシフトしていくために、街づくりに携わってきたプロフェッショナルがなしえる、次世代への贈り物として産み落とされたのが、同書なのではないかとの率直な感慨を覚えた。

とりわけ印象深いのは、執筆者によるメッセージが二つの断絶の克服に向けて発信されていると思われる点である。一つは、スクラップアンドビルドを中心とした従来型の再開発事業の枠を越え、地域の持続的な発展に欠かせない広義のまちづくり領域との連続性の中で、ストック活用型の再開発へ経験とスキルを発展的に転換していく必要性を説いていること。街づくり通史ともいえる視座の獲得を支えに、プロフェッショナルとしての存在意義を新たにし、その役割の断絶を埋めていくまなざしである。そして、もう一つが、プロフェッショナルの必須の仕事として、まちのライフストーリーを一般市民とともに築き上げていくことの重要性を物語っていること。つまり、一般市民とプロフェッショナルのコミュニケーションの壁を越え、価値を社会化し共有していくまなざしである。物的な環境改善を伴う、まちのライフストーリーの生成を持続的にサポートしてくためにこそ、街づくりのプロフェッショナルは存在しているといっても過言ではないのかもしれない。

編集長として同記念出版事業に携わった、高田昇氏は巻頭で「街には魔物が棲んでいる。…（中略）…私たちは再開発という街づくりの手法を発明し、街に棲む魔物と対峙し、都市の再生をめざした第一世代だといえる。」と記している。大規模再開発から身の丈再開発、市街地再々開発、ニュータウン再生、震災復興、長屋再生…。魔物と対峙したプロフェッショナルだからこそ語り得る教訓と提言の数々。次世代へのメッセージが、執筆者一人一人からひしひしと伝わってくる一冊である。■（ひろもと　ゆかり　大阪ガスエネルギー・文化研究所客員研究員）